

実務実習で学んだこと

青森大学薬学部5年生 佐々木 悠哉

【目的】 薬学部5年次の実務実習は薬局11週間、病院11週間実習する。実習の中で様々な症例を経験し、座学では学ぶことが出来ない貴重な経験をし、知識が得られた。

その中で、薬局と病院の症例を1症例ずつ報告する。

【方法】 第1期はテック調剤薬局浜田店で、第2期は青森県立中央病院で、各々11週間、実務実習を行った。

【結果・考察】 テック調剤薬局浜田店では、尿路結石(腎結石)の患者への服薬指導の際に「食事などで気を付けた方がよいことはありますか。」と質問を受けたので食事についての注意点をまとめた資料を作成し、お渡しした。その際に、結石の原因となりやすい動物性タンパク質、シュウ酸、塩分、脂肪の過剰摂取の制限と1日2L以上の水分を摂るように指導した。その後、患者の結石が排出され、痛みが改善した。この症例から病態を理解したうえで、患者の背景を考慮した服薬指導が大切だと実感した。また、患者のライフスタイルに合わせたきめ細かい生活上のアドバイスも必要だと感じ、薬局に常駐している栄養士とも協力して食事面のアドバイスをしていくのが良いと学んだ。

青森県立中央病院では、stageIV、EGFR 変異陽性の右下葉肺腺癌の患者に対する介入を行った。入院時下肢エコーにて下肢血栓が見つかったため、治療目標は血栓リスク軽減とがん化学療法による余命延長であった。下肢血栓治療薬のリクシアナ錠の服用により、鼻血や歯茎出血の副作用が起きたことや、薬の副作用に対しての間違った知識により、アドヒアランス不良の患者であったため、服薬指導では用法用量や副作用の説明だけでなく、服用の意味や副作用の予防策や日常生活での注意点を具体的に説明した。その結果、アドヒアランスの改善がかなり見られ、入院時に比べて、労作時呼吸困難や息切れの改善が見られた。この症例を通じて、肺腺癌の病態や薬物療法、CTCAEによる副作用のグレード評価、副作用の対応について学んだ。また、服薬指導や副作用のモニタリングを定期的に行い、患者との信頼関係を構築することで、アドヒアランスの改善ができるということ学んだ。

【キーワード】実務実習、アドヒアランス、肺腺癌、服薬指導、尿路結石

実務実習で学んだこと

青森大学薬学部 5 年生 中村 歩生

【目的】薬学部 5 年次の実務実習は薬局 11 週間、病院 11 週間実習する。実習の中で様々な症例を経験し、座学では学ぶことが出来ない貴重な経験をし、知識が得られた。その中で、薬局と病院の症例を 1 症例ずつ報告する。

【方法】第 1 期マエダ調剤薬局中央店、第 2 期黒石病院で、各々 11 週間の実務実習を行った。

【結果・考察】マエダ調剤薬局中央店では、「気管支喘息の治療でフルティフォームを使用しているが、吸入がうまくできていないような気がして不安。」との訴えがある患者の吸入指導の依頼が医師からあった。薬局にて練習用の吸入器を使って吸入の様子を見せていただいたところ、補助器具の装着と吸入のタイミングに問題があることが分かった。問題点について指導を行い、その後、何度か吸入手技を練習していただいた結果、吸入手技は改善され、患者の不安も解消された。この症例から、吸入手技を口頭で説明するだけでなく、実際に患者に吸入していただき、その場で問題点があればすぐに指導し、改善することが大事だと実感した。また、吸入指導は一度で完結するものではなく、繰り返し正しく吸入できているかを随時、確認しフォローしていくことが重要だと学んだ。

また、黒石病院では、持参薬のエソメプラゾールをランソプラゾールに切り替え後から腎機能が低下した患者の薬物相互作用について検討した。持参薬の中で腎機能に影響する相互作用のあるものを調べたところ、タクロリムスとランソプラゾールであった。文献調査により、これらを併用すると、どちらも CYP3A4 で代謝され、競合阻害によりタクロリムスの血中濃度が 2~4 倍に上昇し、腎障害が起こるリスクがあると報告されていることが分かった。そのため、タクロリムスと相互作用のないラベプラゾールへの変更依頼とタクロリムスの血中濃度測定の検討を医師に提案した。その結果、タクロリムスと相互作用のないラベプラゾールに変更となり、その後、患者の腎機能は回復した。

この症例から、薬剤師は薬学的な観点から処方 の 妥 当 性 を 検 討 し、 問 題 点 が あ れ ば 医 師 へ の 情 報 提 供 を 行 う こ と で、よ り 安 全 で 効 果 的 な 薬 物 療 法 に 貢 献 で き る こ と を 学 んだ。

【キーワード】実務実習、吸入指導、相互作用、タクロリムス、ランソプラゾール

一般社団法人八戸薬剤師会 阿達 昌亮

【目的】

昨今、ジェネリック医薬品を中心とした医療用医薬品の供給不足が長期間続き、医療機関や保険薬局では必要量の医薬品調達に支障をきたす状態が継続している。八戸圏域の薬局間においては、以前より都度電話等で近隣の他薬局に医薬品融通の可否を確認し小分け調達していたが、最近では不足する医薬品の調達が困難な場合が多く、結果として患者様の待ち時間が増加し、患者様が即時に医薬品を受領できないばかりか全くお渡しできないケースもあり、治療・服薬にも影響が出るなど、適切な薬物療法提供上の課題を抱えている。

これらの課題解決のため、八戸薬剤師会では、圏域内の薬局で活用可能な医薬品調剤情報を共有するために、調剤実績共有サービス「LINCLE はちのへ」を導入し運用を開始することとした。

【本取り組みの概要】

協力薬局で使用するレセプトコンピューターから、調剤実績共有に必要な情報を「LINCLE はちのへ」に自動連携する。なお、連携される調剤実績データは必要最低限の内容になるよう薬局内で自動加工を行うため、個人情報や保険点数等の薬局の調剤情報が送られることはない。

本サービスを用いることで各薬局間で相互に調剤実績のある医薬品を確認し合い自薬局に在庫のない医薬品の処方箋を受けた際、近隣薬局の調剤実績から融通してもらう可能性の高い薬局を検索し問い合わせすることができ、お互いに可能な範囲で医薬品融通をスムーズに行うことができるようになる。

本サービスの導入により医薬品卸の急配の削減が見込める他に、将来的には希少医薬品や高額医薬品等の調達、不動在庫の有効活用、医療用麻薬の夜間休日の融通（予め登録したグループ内）、災害時の医薬品調達等への活用が期待される。

【結果と考察】

登録薬局数は 107 薬局（約 70%）、この内運用開始薬局数は 70 薬局（約 65%）であり、8 月の使用感アンケートでは 60%の薬局から役に立っていると評価を受けた。手配までの時間短縮となったという評価が最も多く、供給が不安定な医薬品を患者へ適切に供給する一助となってきている。

【キーワード】

医薬品の供給不安定、調剤情報共有サービス、地域薬剤師会、ICT の活用

薬剤師と管理栄養士との連携による
生活習慣病の治療に向けた取り組み

テック調剤薬局金沢店 植木怜奈 井筒佑子 浅田彩季 堀籠日南子

【目的】当薬局は高齢者や生活習慣病に関連した患者が多い。生活習慣病の予防、改善のためには、薬物治療はもちろん、食事療法や運動療法も必要である。当薬局には管理栄養士が常駐しており、食事に対する意識や生活習慣病に関連する検査値の改善を目的として、薬剤師と管理栄養士が連携して患者指導を行っている。その中で改善がみられた症例について報告する。

【方法】対象患者は①薬物治療を行っていても数値が改善されず、栄養指導に興味を持った患者②他院・他薬局で治療中だが、当薬局で栄養指導を希望した患者③問診票に食事に関する相談内容を記載した患者とし、投薬後に管理栄養士が食事内容について聞き取り、栄養指導を行った後、疾患と食事状況について薬剤師と管理栄養士で情報を共有した。次回来局以降、生活習慣改善の行動変容に繋がっているかや、検査値の変化について経過の確認を行った。

【結果】ケース 1: 60 代女性。脂質異常症治療中。糖尿病予備群と言われ、コレステロール値、血糖値の上昇について不安を感じ相談。食事状況の聞き取りから飲酒量が多く、食事内容について指導。休肝日が週 1 回から週 3 回となり、1 日の飲酒量も減少した。また、採血結果や血管年齢にも改善が見られた。現在も経過良好である。

ケース 2: 70 代男性。痛風発作再発予防のための食事内容について相談。飲酒量、食事状況を聞き取り栄養指導。プリン体が多い食品を控え、飲酒量を減らしたことで、1 ヶ月で 2kg の体重減少が見られた。尿酸値の変化はなかったが、患者の飲酒や食事内容に対する意識改善がみられた。

ケース 3: 50 代男性。問診票に「メタボで悩んでいる」と記載あり。普段の食事状況を聞き取り栄養指導。飲酒量を減らし、カロリーオフのものへの切り替えや揚げ物を控えた事で、1 ヶ月で 2kg の体重減少がみられた。また軽度のストレッチも始め、太腿のサイズも減少した。栄養指導により意識改善がみられ、治療に対して非常に前向きである。

【考察】薬剤師の薬学的介入と管理栄養士の栄養指導の連携により、お互いの専門性を活かし患者をサポートすることで、患者の治療に対する意識の改善や、行動変容を促すきっかけとなり、より充実した指導が行えると考えられた。今後は、処方医や他薬局への情報提供や、かかりつけ薬剤師となり継続的なフォローを行うことで、内服薬の用量減量や減薬にも繋がっていかねばと考えている。

【キーワード】 他職種連携 管理栄養士 生活習慣病

流通は？プロトコールは？
～八戸地区疑義照会調査 2 回目を経て～

一般社団法人八戸薬剤師会理事 西原大介

【目的】昨年八戸地区で疑義照会の内容を調査し、どのような内容が多いのか、その中で今後の事前合意プロトコールの普及や薬剤師職能拡大によって疑義照会を減らし、業務効率化を図る可能性を検証した。これにより薬剤師にのみ認められた重要な対人業務の1つである疑義照会の重要性を改めて確認したと同時に、さらなる可能性についても検証することができた。今年も同様の調査を行い、昨年と比較しながら主に医薬品流通と事前合意プロトコールについて検証する。

【方法】八戸薬剤師会薬局会員に対しメールリストとFAXにて回答用GoogleフォームのURLを送付し、令和6年7月7日～7月13日の疑義照会があった処方箋毎に回答を得た。回答項目は薬局名、連絡先、日付、処方元医療機関、疑義発見の経緯、照会内容の種類(処方内容か否か)、照会内容とした。そのデータをExcelで集計し、グラフ等で示した。

【結果及び考察】105薬局より回答を得た。期間中の疑義照会総数は860件であった。98.9%が処方内容についての疑義照会であった。流通不良に関する項目は97件の回答があり、全体の11.3%を占めていた。事前合意プロトコール該当は9件と少ない回答に留まっているが全て剤形や規格変更についてのものであった。全照会のうち八戸圏域の事前合意プロトコールを適用すると83件の疑義照会を削減できる可能性があることが分かった。日数・回数・総数に関する項目は197件、その約半数の100件は残薬調整に係るものであり、昨年同様の割合であった。薬剤師の判断で残薬調整可能になれば約半数を削減できる可能性があることが分かった。

【キーワード】疑義照会 医薬品流通 事前合意プロトコール

能登半島地震災害支援での薬剤師の活動
何ができ、何が必要か

ひなた薬局 木皮美賀 ABC 薬局 白滝貴子 ワカバ薬局 阿達昌亮

【目的】活動した中で、災害現場において実際に薬剤師ができること、また必要とされていることが何か。どういう状況下での活動であったのか。また、青森県の薬剤師であるからできたと思われることなどを伝えることで、これから起こりうる災害時に、薬剤師として災害支援活動に一人でも多く協力できるような準備と体制作りを考えていかなければならないこと、また、自局で災害対策のために準備しておくべきことを伝えたい。

【方法】1月25日～29日までの能登半島(輪島市)での実際の活動として行った事は①災害処方箋による調剤と服薬指導。②学校薬剤師としての活動として、空気検査及び衛生指導。③避難所回りにおいて、被災者の方の健康不安に対する心のケア。④地元の薬局の復興の手助け⑤OTCの整理と適正使用の指導

【結果及び考察】

- ① 山梨県のモバイルファーマシーと協力し、災害処方箋による調剤後の服薬指導のための30か所の避難所まわり。
- ② 避難所をまわり、Co2濃度の測定、トイレ等の衛生管理指導。また、避難所に滞在する行政機関や多職種との連携を通じて、避難所で何が必要とされているのかの把握の協力。
- ③ 服薬指導時に被災者の話を聞き、健康またこれからの不安等をお聞きすることで、寄り添う活動をした。
- ④ 輪島市の地元の薬局支援を通じて、一日も早い災害現場の医療機関の復興が必要と思われた。
- ⑤ 混乱した避難所でのOTCの整理や、適正使用の指導、また必要なOTCの選定など薬剤師だからできた。

輪島市では、東京、山梨、佐賀、青森のチームで活動し、他府県の薬剤師から学ぶことも多くあった。東京チームには学薬の薬剤師もいたので、危機管理対策について学ばせていただいた。

【キーワード】 災害支援